



「断固辞させていただきますよ、春花さん」

「.....そんなこと言わないで」

夕餉を前に、寺崎が屋敷を辞した後、春花を捕まえた雪絵は、そんな会話を交わした。

風呂を済ませてほこほことした顔の春花とは対照的に、雨に凍えたような青い顔をしている雪絵。春花もそんな顔の娘を視て、よほど腹に据えかねているのか、と理解する。

「困ったものね。そんなに厭かしら？ 仕事としては好待遇でしょうに」

浴場のある棟から本邸へと続く、屋根伝いの渡り廊下で、春花は口を引き結ぶ雪絵を見返す。

「いや.....というか、自信がないわけではないわよね？」

首を小さく横に振って答える雪絵。

「確かに.....むしろ、仕事としてはやってみたいかも.....」

そう、と春花は瞳を細めて彼女を見遣る。

今この娘に枷になって、こうして半畳を入れさせているのは、あの外交官の存在なのは、問い質すまでもない。しかし、そこに触れないで、雪絵の内心にくすぶるモノに従わせても、それはあまりいい解決にはならないと、そう春花は思う。

「そうねえ.....あなたも色々な任に就いて、色々な人と接してきたから、ある程度は身に覚えがあるでしょうけれど、仕事って、嫌な人とも付き合うことよ？」

こくり、と頷いて返す雪絵。

「.....それは、分かってるつもり。仁美も、初めて話した時にそういう様な事を言っていたし、私も我慢が肝要だと思う」

「あら、イイ子ね。だったら、引き受けてくれればいいじゃない.....っていうのは、意地悪かしら？」

風に髪を煽られて、雪絵は顔を伏せる。だが、顔を伏せたのは、長い髪が邪魔だったからではない。

第四章 太刀の参

自分の心に湧き上がりまた湧き上がる、対処しきれないもどかしい思いに、息がつまり、歯を喰いしばったからだ。

この感情が“嫉妬”というのだとは、以前に本で知った。雪絵は、如何にこの感情が、胸の内で焦れるように歯がゆく、影を持っているのかということ、春花が寺崎と会話をするたびに感じていた。そして、その感覚は時間が経つにつれて、敏感になり、大きくなり、自身の胸を焼くのが分かった。

雪絵は思う。

(こんな気持ち……人には言えない。言える訳がない……！)

まして、目の前に立つ、美しい女、当人に対して。

俯いて、拳を握り、ふるふると震える雪絵の様子に、その顔をそうっと覗き込もうとした春花は、そうして、彼女のつぶやきに身を止めた。

「春花さんのバカ……」

雪絵のその様に、胸が躍る様な、困ったような顔をしてしまう春花。

まるで、恋する男性がつれない時にとってしまうスガタに視えたのだ。

かーわいっ

と内心で思いつつも、口には出さずに、風に煽られて無残にぼさぼさになった雪絵の黒髪を、指で梳いてやった。

「じゃあ、今夜は久しぶりに髪を梳かしてあげる。だからね、それで今回は折れてくれないかな～、なんて、ね」

ちよいちよいと、指が髪だけでなく、額やまぶた、鼻筋、そして口唇へとさがっていく。

春花の指先で、口を塞がれた。

(これじゃあ、イヤって言えないじゃないか……)

ぐすりと鼻をすすり、小さく頷く雪絵だった。

その夜、春花の部屋の蚊帳の中で、ゆっくり、長い時間を掛けて二人はグルーミングした。そして、娘の艶のある黒髪を愛でながら春花は思った。

(この子も不満を口にするくらいにはなったのね。これもまた人としての成長。子の成長か……)、と。

こうして、子を愛でる時間も今だけのモノかもしれないと思う私は、母親として愚かなのだろう。——そんな風にも、また思った。

5

どうも気に入らない。

と、普段ならそんな台詞を、もっと口汚く吐き捨てているのが、彼の常だ。

それは、気性の粗さがそうさせ、まだうまい具合に制御できていない未熟さだと、彼の師であるところの白峰をしても、思わされ、気を割かされる。

今日とて、夏の熱気と道場のいきれの中で、荒々しく木刀を振るう彼のスガタを視てそう思うし、それは彼と手合せをする者も、彼に近い者も同様であった。

しかし、彼——黒原は、そんな荒ぶった挙動とは噛み合わぬように、今日のことについてはここに至るまでも、現在も、不満を口にしていない。ただ、ひたすら、乱暴ともいえる太刀筋で刀技の修練に打ち込んでいた。

日が登って二度目の、昼前の稽古時間。組み太刀地試合も二桁の数をこなして、戦績も良いところを、白峰は黒原に休憩を促した。連れ立って道場脇の井戸へと足を向けた。

「随分と気合が入っているな。暑い時期だ、無理をし過ぎてはもたんぞ」

水を飲む黒原は、ぶはぁッ と大きく息をつき、白峰を横目に視る。

「……はっ。このくらいはどうってこたあないですよ。むしろ、気を抜いていると、別のことで頭に血がのぼりそうなんでね」

ふむ、と顎を搔き、白峰は、

「雪絵のことか？」

と重くならない程度に、空に向けて言った。

「ケッ……、まあ、そうじゃないとは、言えねえですね。気に入らねえっちゃ、気に入らねえ」

第四章 太刀の参

「その割には、今日は儂にも春花にも、雪絵自身にも何も言ってこなかったのは、どういう心境の変化だ？」

少しでも角が取れるのは、悪いことではないが、と白峰は腕を組む。黒原は身を屈めて顔を洗う。しばらくそうして、蟬の鳴き声と、道場からの気合いの声のみが聴こえる。

ややあって、黒原はすくっと身を起こし、手拭いで顔を拭きながら言う。

「気に入らねえのは変わらないですよ。けどよ、いつか視たあいつは……雪はよお。腹が立つが、俺より一重上の気位を持っているように感じちまいました。それがな……」

しゃわしゃわと蟬の声。入道雲の空と、庇の下で影をつくる師と弟子。白峰は、黙って黒原の言葉を待つ。

「それが……よお。あいつはあいつの刀に打ち込んでいるだけみたいでさ、腹が立つが、その点で姐さんや師匠があいつを評価するのも分かる気がした。それに、あいつを姐さんがどうしようと、雪がどういう立場になろうと、俺の刀自体には何の変わりはない……ってのも、気付いた」

「……ほう」

「まあ、総会に顔出させるのは依怙鼻屑にしても、今回みたいに隊長まかせるのは、あいつの腕だと遅かったくらいだしな」

ふん、とそっぽを向き、黒原は忌々しげにしめた。

「まあ、そんな気がしてるだけっすよ。だったら、俺も自分の刀を研ぎ澄ますしかないじゃないですか。あいつがどんな仕事任されていようと」

「また、見つかったのか？」

白峰の言葉に、黒原は息を吐き、空を見上げる。

「いや……そんな易いもんじゃないな。……けど、見つけるために、なんですかね。“その時” のために、今は前よりも強くなろうと思ってんすよ」

「ふん……そうか。まあ、あの翠の鞘も、あれはあれで我を張っていて面白いがな」

「チッ……うるせいですよ」

第四章 太刀の参

弟子の見上げる空を、白峰も見つめる。そして、今この空の下では、日差しが熱を帯びていく中、あの娘も仕事をしているわけだが、それが上手いこと運べば良いが――と顎を撫でた。

丁度同じ頃。霞が関の外務官邸前に、帯刀した男たちが集っていた。

薄手の着物や動き易そうな洋服など、それぞれの出で立ちだが、その鍛えられた躰と、腰のモノに傾けた物腰から、彼らが皆、それなりの遣い手である武侠であると知れる。

その数にして十八人。

男性がほぼすべての中で、颯爽と長い黒髪をたなびかせる者がいる。着物にブーツという格好で、手に若草色の柄の刀を持つ、それは雪絵だ。風が髪を弄ぶたびに、周囲の男たちの視線を集めた。

「お嬢、今日はよろしくお願ひします」

そう声を掛けてきたのは、獅士堂一家から三隊の他に、青刃からの二隊を率いる持国だ。

「ええ、よろしく頼みます」

静かに答える雪絵。そんな彼女を視て、どこか機嫌でも悪いのだろうか？ と持国は想いながらも、連れ立っている小隊の面子を紹介した。

雪絵は気もそぞろという面持ちだったが、同じ任務に就き、背中を預けることになる武侠たちに、返事をしていく。そんな雪絵だったが、しかし、持国の示す侠の中で一際背の高い男の名乗りを聞いて、瞳を見開いた。

「室泉紫恩と申します。よろしくお願ひします、坂本のお嬢」

雪絵はすぐさま思い当った。青刃のシマで、室泉という名――。

では、この男が仁美の慕っている人物か、と。

思わず、返事をするのを忘れて、じろじろと鋭い目つきで見つめ回してしまう。長身で鍛えられている身で、薄い青のシャツが似合うハンサム。雪絵は、

第四章 太刀の参

瞳を半月にしてしまう。これが仁美の男の趣味か、と漠然と思う。

(面食いというヤツかな.....)

「お嬢、どうしたんで？」

間に立つ持国が、怪訝に思って聞いてくるので、雪絵は考えを定める。まだ任務の開始まで間があるので、少し問い詰めてみることにするか、と。

「室泉.....と言ったわね。あなた、清家のお嬢さんと面識があるかしら」

その突然の質問の意図もそうだが、そう問うてくる雪絵にどこか険を感じるのか、室泉もわずかに眉を寄せた。困惑した顔も、カタチが整っているの、見栄えがよいな、と雪絵は思いつつも、だからこそ少し警戒心を持った。

以前、春花は月艾組の若頭が、見た目は秀麗であっても、しかしその人間の中身が大事だというような話をしていた。それが雪絵に、目の前のハンサムな青年を安易に善いモノとは判じさせなかった。

「ええ.....、清家のお嬢の仁美さんは、何度も護衛させて頂いたことがあり、知った間柄です」

「紫恩はこの辺じゃあ、指折りの実力者ですよ、お嬢。清家のお嬢のことなら、心配いらないですよ。それに、今日の仕事もね」

にかっ と笑って持国は少し張りつめた空気をほぐそうとしてくる。

そんな気遣いを無下にするほどに、持国との間柄もなくはない雪絵は、そう、と頷く。

「では、よろしく」

続いて、持国ではなく、自隊の率いる面子を室泉が紹介していく。返礼として、雪絵も獅士堂側の顔ぶれを紹介していった。一応、稽古で幾度となく手合せし、顔も覚え、話しもする同じ釜の飯を喰っている顔ぶれである、十二人全員の名を持国たちに伝えた。

その後で、雪絵は自分が初めての隊長ということで、隊を率いた経験のある持国や室泉と言葉を交わした。その内容は、主に持国が「気楽にやればいいですよ」と言い、雪絵は「うまくいくようにやってみる」とそっけなく言った。それに対して、「うまくですか.....」と室泉が呟いたくらいだが。

第四章 太刀の参

そうしていると、外務官邸の門をくぐり、今回の電波塔建設予定地、視察の要人たちがぞろぞろと出てきた。

「全部で……十一人か。それなりの数ですね。いや、絞った方なのかな」

「ええ、春花さんはこれくらいの手数を事前に聞いていたけれど、やはり護衛でこの数は面倒そうよね。だからこそ、この小隊数を組んだんだね」

ワイシャツにネクタイという、夏場の西方のビジネスマン然とした服装の男たち。年齢は中年を超えた者と、それなりの若い者など様々だ。

「あれは出資者とその秘書ですかね」と持国が囁いてきた。

そして、その横を視る。日焼けをした、体格がよく、いかにも肉体労働者という男たちもいる。彼らの差は、スポンサーと建設業の棟梁衆であることを明確に分からせた。

しかし、似たり寄ったりの服装だな、これが西方の主流なのかな……しかも長袖で、と雪絵は首を傾げる。

「皆様、本日は私どもの仕事のためにお集まりいただき、お力添えくださり、大変ありがとうございます」

傍らに副官と秘書官の二人を連れた寺崎が、進み出て場を執り成し始めた。

どうやら今日の仕事の開始である、と雪絵は彼を直視しないように焦点を後ろの副官たちに合わせて、寺崎の方を向く。

その視線に気付いて、寺崎が雪絵に歩み寄ってきた。そして、にこやかに挨拶をする。

「獅士堂一家、坂本の隊長さま……で、よろしかったですか？ 本日はよろしくお願い致します」

雪絵が隊長であることは――途中揉めて辞そうとしたけれど――先日の獅士堂邸でお互い同じ部屋で話を通している。しかし、寺崎の柔和な態度に、慣れ慣れしさはないものの、放っておけばいいものを、ちゃんと仕事はするよ、と内心で舌打ちし、雪絵は目元を鋭くする。

そんな彼女の表情に顕れる若干の険に圧されずに、むしろ押し返すように、すつと寺崎は手を指し出した。

「……ぐっ」

その意図するところに気付く。そして、思わず無様な声が漏れる。

(春花さんにも仕事を一緒にするのだから、友好の握手を求められたら応じるくらいしなさい、とは言われたけれど……、それに、いくら嫌いな相手でも、仕事なら相席や相乗りしても、表情に出すのは礼を逸するとは思うけれど……ッ)

脇の方で、持国が内心で「お嬢！」と叫んでいる気がする。ふう、と息を吐き、震えてへんな汗をかく手をじりじりと、なめくじでも掴んで放る時の手つきのように伸ばすと、雪絵は寺崎と握手をした。

それに対して、寺崎の方からがっしりと握る手に力を入れてくる。瞬間的に、それに振り回されることに反発心と敵愾心の炎を燃えたぎらせた雪絵は、ならばこちらも退く気なし、負けてやる気はなし、とばかりに最近とみに強くなった腕力で彼の手を握り返した。

本来ならば、その力加減は、寺崎の手を握りつぶさんばかりの勢いだった。思わず、「お嬢ッ！」と持国が痛烈そうな声をあげた。しかし、雪絵の相手の手を破壊せんが勢いの握り込む手が、痛くて仕方がない筈の寺崎は、にこやかな顔を崩さずに、ただやんわりと自分の手の力を抜いただけだった。

「ふん……っ」

その反応が面白くなかったのか、雪絵はその手を放り出すように解放し、着物でぱんぱんと払った。

今度こそ堪らず、持国が、

「お嬢！ 仕事ですので、しっかり」

と、たしなめた。

それに対して、多少のすわりの悪さを感じた雪絵は、払う手をぎこちなく戻し、腕を組んで寺崎に対する。

「護衛の任、しかとまっとうさせていただきますよ。本日は、どうぞご安心して、我ら獅士堂の武俠に命をお預けください」

「それは頼もしい。しかし、出来れば荒事は無いに越したことはありません。

今日同行する者の多くは、刀郷の倣いに明るくなく、刃傷沙汰とは無縁の方が大半です。そここのところも、どうぞよろしくお願い致します」

「.....それは保障しかねますが。流血をみたくない、と申されるのですか？ それはこの郷で仕事をしようとするのに、いささか覚悟が足りないのではないですか」

年端のいかぬ少女――しかし、本物の日本刀を携えている、武俠の一人であるらしい雪絵――のモノ言いに、寺崎の後ろに居並ぶ西方の者達は眉根を寄せ

る。しかし、寺崎は夏の午前の日差しも、雪絵のモノ言いも意に介さない涼しげな声音で、返した。

「そこは確かにそうだと言えます。ですので、この郷の武俠の、堅気を傷つけないととすること、信頼したいと思います」

言うじゃないの、と腹がムカつく思いで寺崎の言と、彼を吟味する雪絵。

「そうですか。けれど、本当に自分にとって不都合な事を止めたかったら、それを犯す人間もいるのが、世の常というヤツかもしれませんよ」

「そうそう、ですから、そのために自分たちのような立場の者が、しかとお護りするんですよ。ささ、お二方、日も高くなってきて、これから一層暑くなります。話は移動しながらでも出来ますし、他のお歴々をあまり待たせるのも難です。ここは仕事を進めてはいかがでしょう」

汗をかいている持国の仲裁に、雪絵が腹の底から舌打ちした。

(言い負かせていたら、少しは気も勝って我慢する気になれるのに.....)

そんな長い黒髪の少女の様子に、彼女の倍は年齢を重ねている寺崎は、別段変わった表情も見せず、では、と振り返る。

それから、西方側の要人の紹介を寺崎がさっと済ませて、一行は目的地に向かって歩き始めた。

その道中で、雪絵は背後に揃って歩く西方から来た堅気の衆の声を聴いていた。

今回の電波塔建設の出資者らしい一人が、寺崎と刀郷の教育について話をしているようだ。しかし、寺崎の声が耳に入ると、雪絵はただでさえ鋭い目つきを三角にして歯噛みした。うるさいなあ、と思う。

「この郷でも学校教育は根付いておりますが、それは学歴ではなく、純然と自己を高める向きが強い傾向が、私は気に入っております」

「それは、本土西方の教育が形骸化してきている向きもあるということですよね」

と問い返す男に、寺崎は答える。

「そういう向きもないとは言えないのが悔しいところです。無論、全体ではないのでしょう。それでも、学校で学ぶことの意義を、良い職に就くためならまだしも、義務であるから取り敢えずやっている、という層が生じ始めていることを、私は遺憾に思っております」

「そうですね、昔は学ばせてもらえんモンも多かったから、皆学ぶことには必死だった筈ですからなあ」

と建設業者の棟梁が太い声で横から言った。

「こういうのも、少し乱暴に聞こえるかもしれませんが、学歴は特別な才能を持たない者にとって、社会に出るにあたってそれに比肩しうる能力を身に付けるための素地を養うモノであり、特別な才能を持つ人間と同等に社会で有益であるための最大の武器になるのです。勉強することが戦い方となる。それをおざなりにするのは、本来死活問題なのだと、就学に消極的な若い世代にははやく気付いてほしいという思いもあります」

(あー、もう、べらべらと……！ 暑いのにッ)

そんな苛立ちを口の中で回し、手にする刀の鐔をざりと指でなぞる。

(はあ……。ホント、なんでこんな仕事をするようになったのやら……)

それは、自分が春花の甘やかな態度にほだされて、強固に、断固に、堅固に反対しなかったせいだと思い返され、今日何度目になるか分からない舌打ちを

する。

そんな雪絵の傍らから、持国が身を寄せてきて、彼女の腕を引き、一同からわずかに距離をとる。

「お嬢、あんまり態度が悪いと、色々まずいですよ。折角隊長を任されているんですから、大人の対応をしてください。でないと、俺もお嬢も、後で姐さんに叱られますよ」

「……、わかってるよ」

「いや、いや。本当にわかってます？　じゃあ訊きますが、仮にこの視察の最中に、建設に反対の勢力なりが襲撃してきたとして、お嬢、他の堅気さんならともかく、あの外交官の御仁を背に守って闘えますか？」

「うっ……」

ほれみたことか、と持国は大仰に溜息をつく。

「お嬢、こう言ったら気を悪くするかもしれないですが、お嬢が何故あの御仁を毛嫌いするかは置いておくとしても、こういう仕事だって解かっていたんですから、お嬢の方も覚悟してくるべきだったんじゃないでしょうかね」

「……む、なによ、私が心得なしだと言うの」

「だって、そうでしょうよ……」

日差しの所為だけではないだろう、持国がまだ任務も始まったばかりなのに、疲れた顔をする。その横から、すっと影が差す。

「――横から言わせてもらいますが、それは持国さんの言う通りですよ、坂本のお嬢」

「あなたは……」

「ああ、紫恩も少し言って聞かせてくれると助かるよ」

うつむく持国の様子に、雪絵は（やっぱりこの人気遣い人だ）と少し申し訳なく思う。しかし、会話に混じって来た男に対し、視線を向け、眉をピクリとあげて言う。

「室泉さん……だったわね。あなたも、私が心得知らずだというのね」

「そうですね」

第四章 太刀の参

鋭い視線にも、涼しい表情で室泉はしれっと頷く。それに対して、今度はこっちの間か?! と持国が氷水を頭からかぶったような顔をした。

しかし、雪絵はその返答に、不機嫌さを更に倍加速させることもなく、「そう」と静かに頷いた。

「私が覚悟が足りないと……。それは、何の覚悟だと思いかしら。少し話をしましょうか」

「構いませんよ」

あああああ?! と持国が内心で両手をあげた。

「思うに、確かに私はあの外交官を嫌っているわ。それでこの仕事を引き受けたのだから、そこは我慢しなくてはならないところだと言いたいのかしら」

「それもあります」

「?そう。それだけじゃないのなら、なんだというのかな。よく解らないな.....」

素直に指摘と向き合うのはいいのだが、浮上した疑問に考えこんでしまう雪絵に、持国はこれで険が納まれば、と淡い期待を抱いた。

しかし、こちらも刀を振るう者である室泉は、同じ気位を持つようで、持国の心配をよそに果然と斬り込んできた。

「思うに、お嬢は武侠の心得を持っているのでしょうか？」

「.....は？」

「おい?! 紫恩ッ」

持国が、自分よりも背の高い、しかし年下の青年の腕に縋りつく。しかし、当の室泉は涼しい表情のまま、向けられる片や焦りと、片や静かな怒りの視線を受ける。

「.....私に、武侠の心得がないと? 私の腕に、至らないところがあるというの？」

「違いますよ、お嬢」

かぶりを振ってみせる室泉の憂いの表情に、雪絵は否が応にも反発心を募らせる。

第四章 太刀の参

今日は男に苛つかされる感じの日だろうか。

「違う？ 刀技でないなら、精神かしら。自分で言うことではないのでしょうけれど、獅士堂の太刀のころは、未熟ながら重んじているつもりよ」

「尊意はあって然るべきです。しかし、この郷の武俠は、刀で相対する者へのそれだけでは、十全ではないはずですよ」

「？」

わかりませんか？ と室泉は静かな、しかし深い彩の目をして雪絵を視る。そして、言った。

「お嬢。この郷の武俠の心得で、太刀合うことと同じくらい大切なのは、堅気という護るべき民への心であると、自分は思うんです」

堅気への心。

雪絵は、その言葉を耳にして、最初、『そんな当たり前のこと』 と思った。

それは、獅士堂の組の一員としてではなくとも、この郷の武俠として、堅気を傷つけることがあるまじきことだと教えられてきたことで、雪絵ですら当たり前だと思えていたからだ。

かつて、その堅気を傷つけないという信義に悖る状況にあった武俠と太刀合ったし、実際、この郷にはそういうスジを逸した武俠は数多くいて、後を絶たない。だからこそ、武俠は堅気を傷つけないころを当たり前前に立てているべきで――。

「そうですね。だからこそ、ではありますが、しかし、我ら刀郷の武俠は……刀とは、咎人を斬り、仁義に悖る者を斬るだけのモノではない筈ですよ」

室泉の静かな声に、雪絵は考え、言う。少し意外で、新鮮な気持ちを抱きながら。

「……堅気を護ることが、武俠の心得……だと？」

「そのひとつだと、自分は心得ます」

隣で、持国も汗をかきつつ、必死にうんうんと頷いている。

そして雪絵も、その言葉を反芻し、咀嚼する。

「堅気を護ることが……武俠の心得……か」

第四章 太刀の参

武俠として、刀を振るい、人を斬る。

それは、刀の性ともいえる。そして、そこに雑念はいらない。相手の太刀合いに挑む想い——気位に対して尊意を抱くのであれば、迷わず、躊躇わずに刀を振るい、全力で斬る。それが、武俠としての、互いに持つべき精神だ。

(だがそれは、刀を介して向き合う武俠同士の心得だということか)

春花との会話の断片を思い出す。

獅士堂もこの郷の武俠も、本来はかつての江戸の忠義の武士がそうであったように、国と民を治める為の武こそが、本当なんだと、そういう話をいつかされた。それはつまり、民を護ることであり、その精神を引き継いだこの郷で、武俠が一番に為すべきことが、刀を振るい、堅気を護ることではないか、という話だ。

だから、この郷の武俠のスジ——仁義とは、堅気を傷つけない武であり、堅気を、民を傷つけることがスジに悖ることとされ、問題とされ、咎となるのだ。春花はあるとき、そんな話をしていた。

そして、そうして堅気を護ることで、ひいては郷の——無法にして無頼の徒の地の秩序を護ることにつながり、一見して法治国家ではなくまもとまりがなさそうなこの土地が、しっかりとまもとまり続いていく——人の暮らす地として治まっていくために必要なことでもあるというのだ。

「武俠の刀は……武は……、太刀合う相手を斬るという為だけのところで在るのではない……と。郷の為に、人が暮らしていく為に、その民という堅気を護る為にも必要……ということかな」

雪絵のそのつぶやきに、室泉は懐の深さを感じる優しい目で頷く。

そして、杳々と、春花や多くの武俠が口にしていた “堅気を傷つけないこと” という信義の本質を雪絵は掴んだ気がした。

「……それは、確かに私、心得が拙かったよ……」

小さく漏らし、そしてゆっくりと室泉を視る。

「ふうん……」

改めて、その顔を視て、雪絵は息を吐いた。

第四章 太刀の参

僅かの間会話——そして、その男の口ぶりは決して多弁ではなかったものの、的確に雪絵が未だ不明瞭なことを指摘した。そして、うまく会話から彼女の思考を導き、在るべき答えへ辿り着かせた。それは、一応雪絵にも積極的に自ら思考し、答えを導き出そうという姿勢があったことで至った答えでもあるのだから、室泉一人の功績ではないとも言える。だが雪絵は、この男は自分よりも年輪を重ねていて、そのうえでシマでも屈指といえる遣い手であり、だからこそ経験も豊富だから、自分がまだ視えていないことに既に辿り着いているのだと分かった。

これまでも、春花や白峰がそうであったことで抱いていた感覚を、雪絵はこの時初めて室泉にも感じた。

それに対して、しかし目の前の男に僅かの反発心を覚えながらも、しかし雪絵は 『面白い』 と思った。

優しげな顔をする美丈夫に、雪絵はそうして不敵な笑みを返した。

(仁美が見込んだ男なだけはあるのかな.....中々見所のある男じゃない)

「勉強になったわ。室泉さん」

「.....紫恩でいいですよ、坂本のお嬢。室泉って、いい辛いですからね」

.....続く。